

■研究調査レビュー

徳之島喜念・佐弁砂丘一帯遺跡トマチン地区(仮称)第一次発掘調査概報 新里 貴之 (埋蔵文化財調査室)

1. はじめに

徳之島は、南北26km、東西最大幅17kmで、琉球列島で6番目の大きさである。地形は、標高200m付近を境に、山地と段丘発達地に大別される。北部には花崗岩類の貫入が著しく、南部では石灰岩の発達著しい。また、井之川岳北西方や剥岳東麓付近では、蛇紋岩の岩脈が断層に沿って貫入している。ほかにも火成岩類として、玢岩・石英斑岩・流紋岩・アプライトなどが確認されている(木崎1985)。

伊仙町は、古くは三宅宗悦(1935・1940)によって、喜念原始墓などの調査がなされ、確認されている遺跡の数は、徳之島でも最も多く(東・中村1989)、それは、伊仙町歴史民俗資料館の義憲和氏による調査の功績が大きい。トマチン地区もまた、同氏によって確認された遺跡である。

徳之島喜念・佐弁砂丘一帯遺跡は、鹿児島県大島郡伊仙町字喜念～佐弁に所在する(写真1・図1)。標高14～17mの砂丘地であり、喜念地区の砂丘の発達著しく、トマチン地区で非常に規模が小さくなる。この地域の基盤は石灰岩であり、その上部に黄褐色のシルト層が覆う。上流には尾母層の緑色岩類の分布が見られる(木崎1985)。特に喜念地区は、海浜がよく発達しており、海水浴場として、かつては家族連れのにぎわいを見せていた場所である。現在でもときおり、海水浴をする者や闘牛を散歩させる姿が見られる。それに対し、トマチン地区は、鋭い石灰岩の露出する岩礁性の海岸であり、砂浜をほとんど形成していない。台風18号の際には、消失してしまったほどの小規模な砂浜である。

今回は、このトマチン地区について発掘調査の概要を報告する。

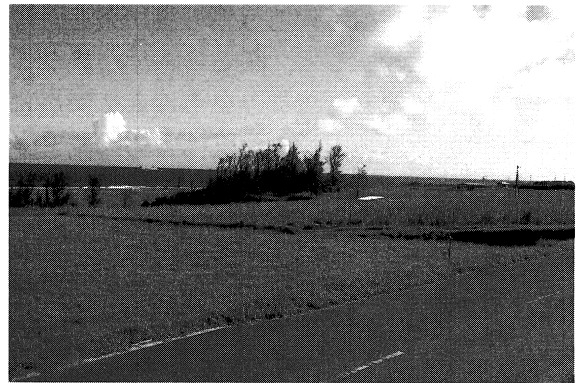


写真1 トマチン地区遠景(北より)

2. 調査の経過

調査体制は、以下のとおりである。

所在地：鹿児島県大島郡伊仙町字喜念マインズ1530番地・佐弁トマチン307番地

調査者：新里貴之・中村直子(鹿児島大学埋蔵文化財調査室)・竹中正巳(鹿児島女子短期大学)

岩永勇亮(鹿児島大学4年次)・山野ケン陽次郎(鹿児島大学3年次)

徳嶺里江・宮城明恵・登真知子(沖縄国際大学4年次)・小橋川剛

具志堅亮・大屋匡史(沖縄国際大学3年次)

中村友昭(熊本大学修士1年次)

調査協力者：西銘章(嘉手納高校教諭)、島袋綾野(石垣市市史編纂室)、安座間充(沖縄県立埋蔵文化財センター)、横手浩二郎・西園勝彦

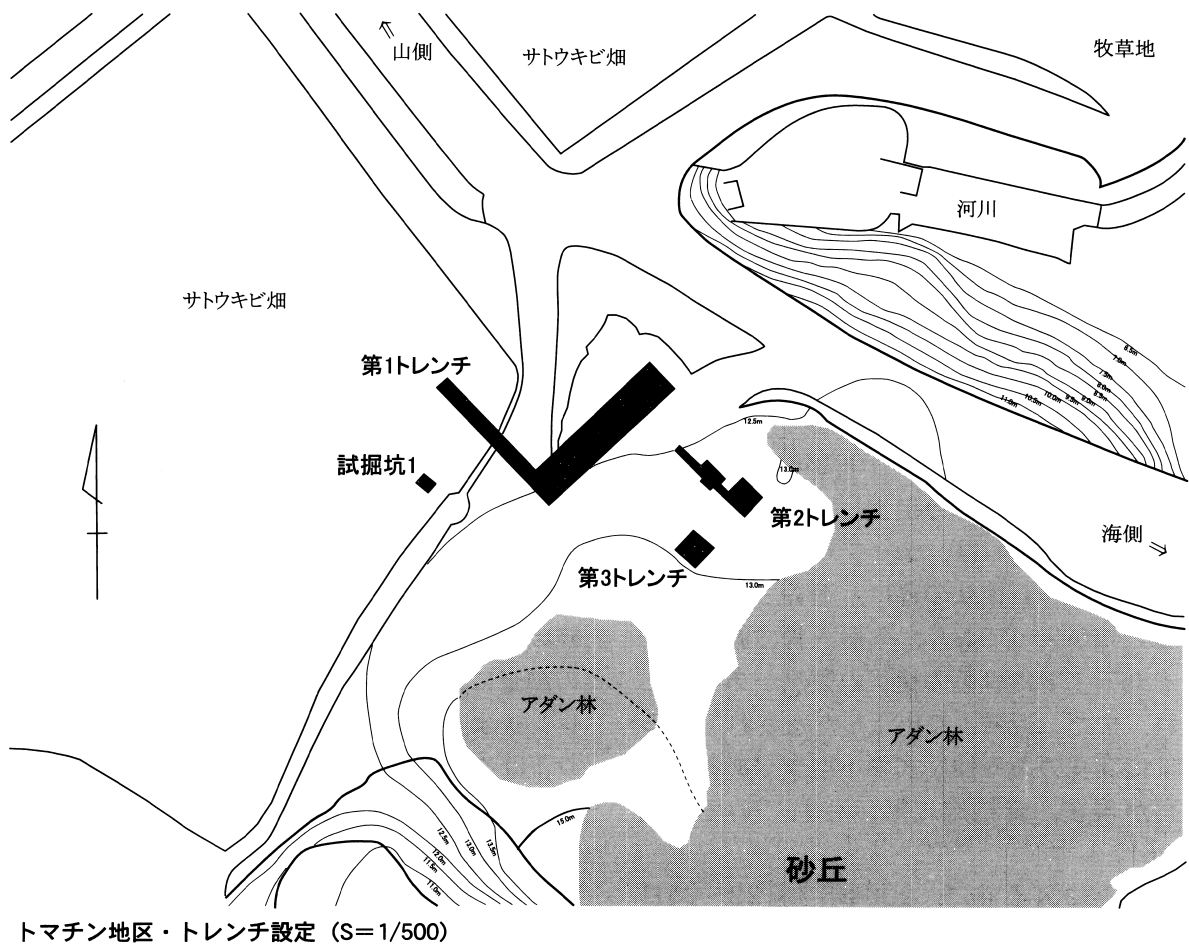
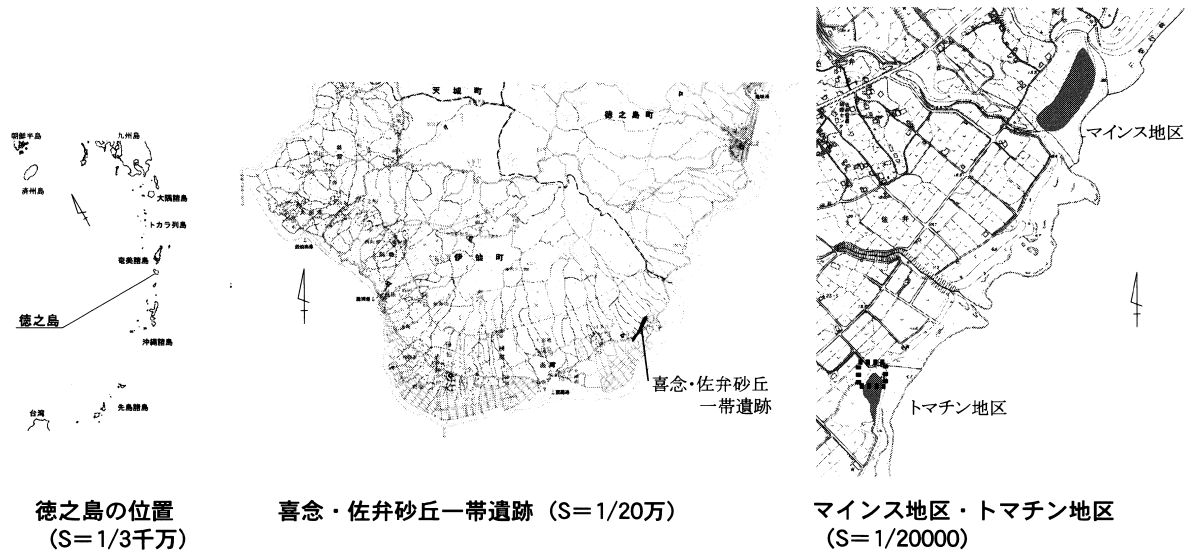


図1 遺跡の位置

(鹿児島県立埋蔵文化財センター)

調査指導: 中山清美 (笠利町歴史民俗資料館), 新東晃一 (鹿児島県立埋蔵文化財センター), 岸本義彦 (沖縄県立埋蔵文化財センター), 小畑弘己 (熊本大学), 上村俊雄 (鹿児島国際大学)

調査期間: 2004年8月13日～9月13日

調査面積: 喜念マイナス地区8.5㎡
: 佐弁トマチン地区48.85㎡

遺跡の現状: 砂丘 (砂防林)

新里は、2004年度より3年間の文部省科学研究費を受け、喜念・佐弁砂丘一帯遺跡発掘調査団を組織した。同調査団の中村・竹中と話し合い、マイナス・トマチン地区をその調査地点に選定した。また、伊仙町歴史民俗資料館の義憲和館長、伊仙町教育委員会の四本延宏係長・新里亮人氏らと数回の協議を重ね、調査まで数回の段取りを行った。また、この喜念・佐弁砂丘一帯は、天然記念物オカヤドカリの生息域となっており、調査には慎重を要する場所である。県とのやりとりで注意があった。

トマチン地区については、通称、西ミヤド遺跡とも呼ばれており、1992年に重機による掘削で人骨が数体分出土した地点である。義憲和館長によれば、テーブルサンゴの床石と立石を持つ石棺状の墓に、追葬された数体分の人骨が入っており、下層人骨の胸部にヒスイ丸玉・下に骨製の槍状の製品があったとされ、また、近隣より出土したとされている、底部に穿孔のある仲原式の小型甕 (あるいは鉢) が現在、資料館に展示されている (義1996)。

本調査に入る前に、2004年7月22～25日にかけて新里・中村・竹中が試掘調査を行った。試掘調査では、砂丘ではなく、畑地に試掘坑を設け、土層の確認を行った。ここでは、

7枚の層が確認でき、約1m下に7層目が最下層のシルト層であることが確認されたため、本調査における掘削深度の方針が決定した。

本調査において、新里は、調査団を複数の大学生による混成部隊で行うことを決め、鹿児島大学・沖縄国際大学・熊本大学に連絡をとり、それぞれ、学部生2人、学部生6人、院生1人の9名の調査員を得ることができ、面縄東公民館を宿舎として自炊生活をしながら、発掘調査を行った。

先発隊は8月13日に鹿児島を出発し、各調査員は、それぞれの日程に合わせて逐次離合した。

トマチン地区においては、1992年に人骨が出土したと考えられる地点を包括するように、畑に向かって直交するL字のトレンチを設け、第1トレンチとした。このトレンチの目的は、砂丘の形成過程を確認することであった。同トレンチは、L字の角の杭を基準としてグリッドで区切り、北から南にa～c、西から東に1～4とした。貝塚の発掘調査が目的ではないので、ここでは、4a層まで掘り下げ、貝塚の存在を確認した時点で掘り下げを中止した。一部にサブトレンチを設け、5層までは確認している。

第2トレンチは、アダンに囲まれた砂丘の最も開けた最頂部に2×2mのグリッドを設定した。ここでは、多数の礫群が確認され、SK1と名づけた。一部にサブトレンチを設けて、図・写真を撮りながら掘り下げたが、礫の重なりは下位へ続くことが分かり、次の調査に持ち越すこととなった。この第2トレンチより北方向に先行トレンチを設け、掘り下げを行ったところ、墓壙を確認し、SK2とした。ここでは、墓壙の性格の一端を知るために、トレンチの拡張を行い、墓の形態が判明した時点で、調査を中止し、次回へ持ち越した。

さらに第3トレンチは、第2トレンチの西側2mの地点に防風樹モクマオを避けるよう

に、2×2mで設定し、ここは、砂丘頂部の堆積状況を見るための深掘りトレンチとすること、そして第2トレンチから墓域が延長するかどうかを確認することを目的とした。ここは、地表下2m前後で7層を確認した時点で、この7層の脆い性質を考慮し、掘り下げを中止した。

調査時は、灼熱の陽射しやスコール様の雨に悩まされ、また、8月29日、9月5～7日に、台風16号・18号と次々に来襲し、台風対策にかなりの時間を要した。そのため予定よりも一週間長く滞在することとなり、9月13日までに調査を終了した。また、オカヤドカリの大群が、毎日、防御したトレンチ内に入り込み、壁を破壊し続ける状況下の調査であり、毎日、オカヤドカリの除去作業から始め、丁寧に容器にいったいにならないようとり、放してやるのであり、休憩後も必ずその作業に追われた。調査員の苦労は大きかったと思う。

3. 層序 (図2)

基本層序は、13層確認できた。ほとんどが粗細砂層であるが、最下層の13層は堅く締り、水分を含むシルト層である。

砂丘の北東部の一部を除けば、1層である表土から2層まで、ほとんど攪乱された形跡がなく、遺跡の残りのよさを示している。全て砂層であり、遺物をほとんどの層から出土する。特に、5層における遺物の出土が多く、貝塚であると判断される。

トマチン地区の砂丘は、最下層のシルトの状況で判断すると、山手側にはシルトが高く、海側に向かって急激に低く傾斜している地形であり、おそらく、基盤層である石灰岩も同様の傾斜を持っていると考えられる。そこに自然の営為によって砂が自然堤防状に堆積してゆく砂丘では、海に面した部分とその後背部では、堆積状況が同じであるとは言い難い。しかし、肉眼観察の結果においては、砂丘頂

部と後背部の層の対応関係は明確であるように思われた。ただし、第3トレンチで見ると、砂丘頂部の砂層は厚く、また脆く堆積しているため、2m程度の深さで壁面崩壊の危険性が増加し、深掘りの調査を断念せざるを得なかったため、砂丘後背部である畑側(第1トレンチ)と同じ13層まで確認することは不可能であった。層位の対応関係には慎重を期さねばなるまい。

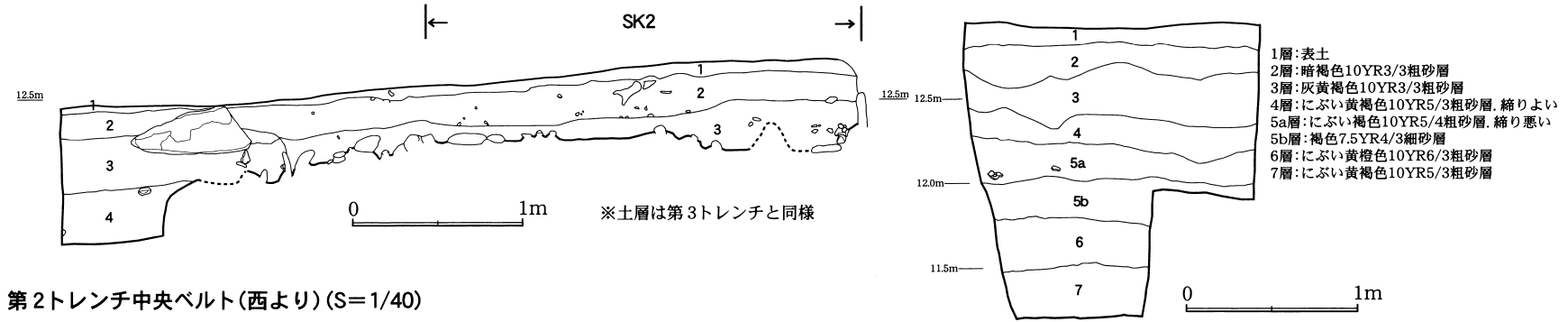
4. 遺構

SK1 (性格不明の礫群：写真2・図3)

第2トレンチ内で確認された石灰岩礫やテーブルサンゴ、緑色岩類の礫群、パミスの集積を便宜的に呼称しているもので、今後の調査によって範囲が確認された場合、SK2の一部として認定できる可能性も含む遺構である。遺構上部で、骨片が1点出土し、墓の可能性もあるとして、サブトレンチを設け、4方向の見通し断面図を作成しながら掘り下げたが、礫群の重複は終わりを見せなかった。また、礫群のない南側にもサブトレンチを設けたが、30cm程度下位に緑色岩類の礫群が検出された。調査期間の関係上、これ以上の時間をとることは難しく、次回以降の調査に持ち越すことに決定した。したがって、現段階ではSK1は、性格不明の遺構である。

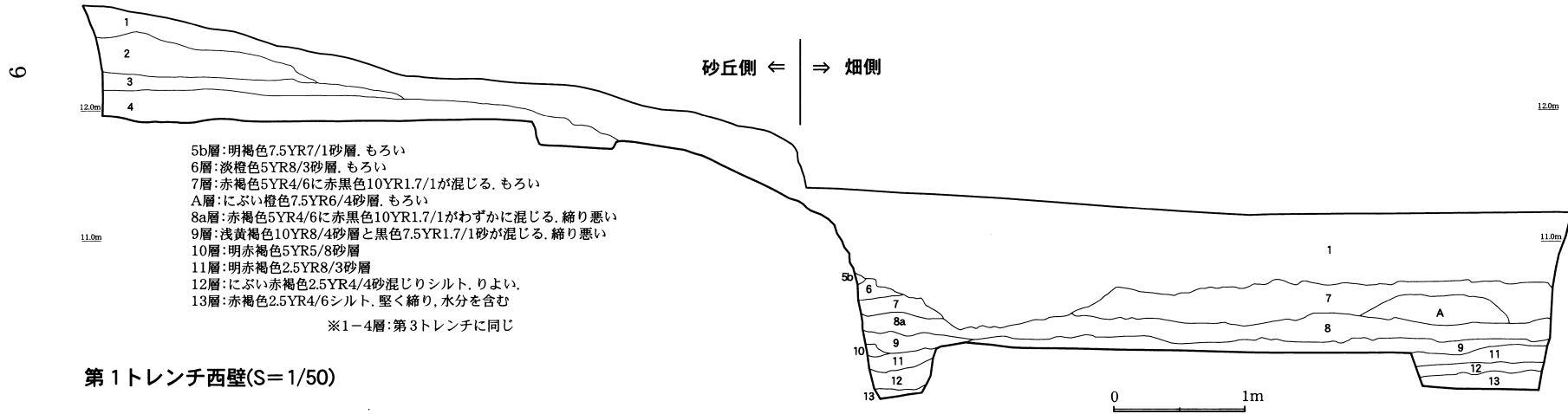
SK2 (墓壇：写真3～5、図3)

SK1の範囲確認のため、第2トレンチに隣接して、北側へ延びる先行トレンチを設けた際、先行トレンチの中央部で検出された遺構であり、下部構造は「配石墓(はいせきぼ)」である。墓壇の周りに40cm大の平石(テーブルサンゴなど)を積み重ねて小口積とし、方形に巡らせていると考えられ、墓壇内にも一部に床石が確認されている。また、南側には、テーブルサンゴを立石として、外側から数個の礫で押さえられている。墓壇の周りには拳大の石灰岩礫や緑色岩類の礫が敷き詰められ



第2トレンチ中央ベルト(西より)(S=1/40)

第3トレンチ北壁(S=1/40)



第1トレンチ西壁(S=1/50)

図2 トマチン地区層序

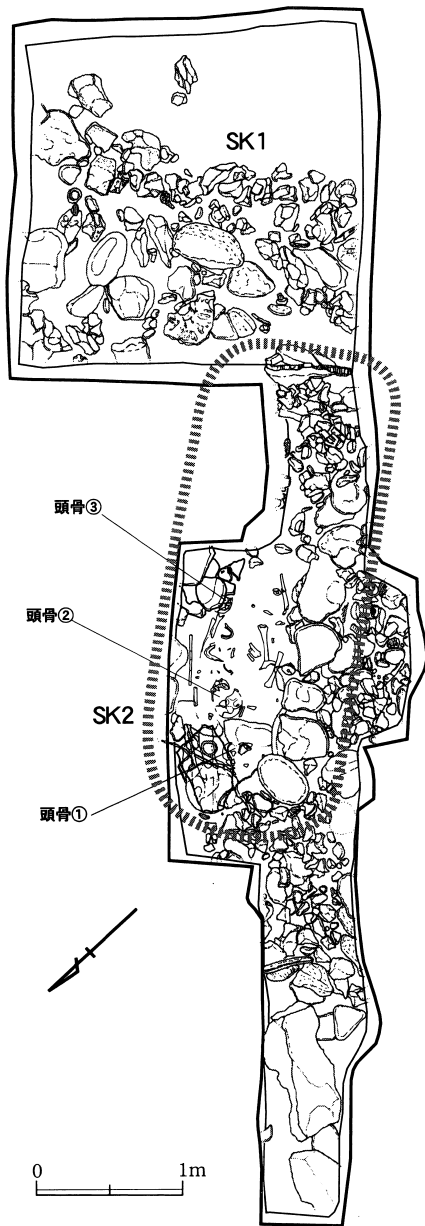


図3 第2トレンチSK1・2 (S=1/40)



写真2 SK1近景 (南より)

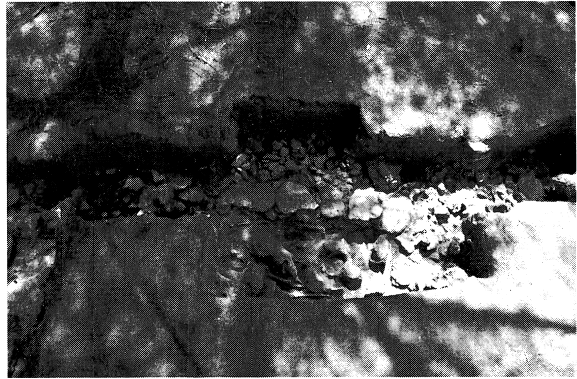


写真3 SK2近景 (東より)



写真4 SK2墓坑部分 (西より)



写真5 SK2墓坑部分 (北より)

ており、本来は墓壙を覆った標石ではないかと推察された。つまり、小口積の石棺を下部構造とし、多量の礫群で上部標石とした墓制である。墓壙内の下位には、一次葬の被葬者があり、顔面を破損している。その上位には、現段階で確認できるだけで、2体の改葬された人骨があり、その上部には、50cm程度の大きな礫（北側頭蓋）や30cm程度の礫群（南側頭蓋）で押さえられている。一次葬骨の顔面の破損は、この改葬段階によるものであらうと考えられた。一次調査では、3体分の被葬者を確認したことになる。

また、墓壙内の側壁に、四肢骨の長い部分のみを巡らしている。墓壙内には、ヒスイ玉1点や貝小玉1点、ゴホウラ背面利用貝輪1点が出土しているが、本来の原位置を保っていないと考えられ、おそらく改葬骨を収める際に動かされているのではないかと判断した。また、墓壙上部にもゴホウラの体部に穿孔されたようなものや、巻貝の化石、破損したヤコウガイなどがあり、現段階では墓制に伴うものと判断している。SK2もまた、調査期間の関係上、人骨を取り上げる時間がなく、埋め戻して保護したため、性別・年齢・形質的特長などの人類学的調査については、二次調査へ持ち越すこととなった。これ以上の情報を得ることはできない。

5. 遺物

発掘遺物は、自然遺物と人工遺物が得られた。自然遺物は、専門化の同定を行っていないので、ここでは人工遺物のみを取り上げる。人工遺物は、土器・石器・石製品・貝製品などが確認できる。各層から出土した時期判断基準となる土器は、ほとんどが南西諸島において縄文時代晩期～弥生時代前期に並行する、いわゆる「仲原式土器」であり（新里 1999）、わずかに5層以下に「喜念I式土器」・「宇宿上層式」とみられる土器が混じる。1～4層には、それ以後の遺物はほとんど含まれておら

ず、表土に5mm大のカムイヤキ陶器1点と、攪乱層に近世以降の遺物が含まれる程度である。したがって、現段階においては、この砂丘自体、縄文時代晩期～弥生時代前期の時期ごろの時期に形成されたものであると判断された。

土器（写真6）

【宇宿上層式土器】第1トレンチ11層出土。三角形の肥厚口縁を呈する（h）。

【仲原式土器】第1～3トレンチの第2～6層まで出土する。幅広の肥厚部を意識した口縁部を有する甕・鉢形土器、また、薄手壺形土器の研磨技法などは、この土器様式の特徴である。この遺跡で最も出土量が多い（b・d・f・g）。

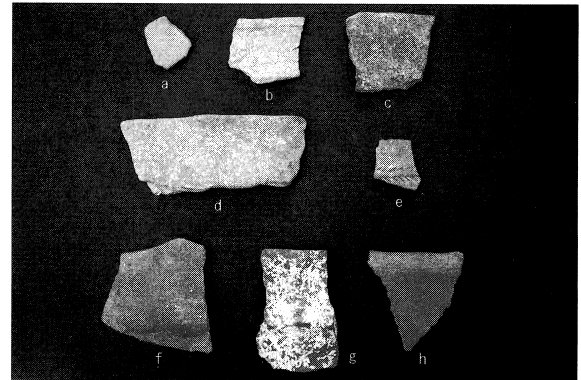


写真6 出土土器

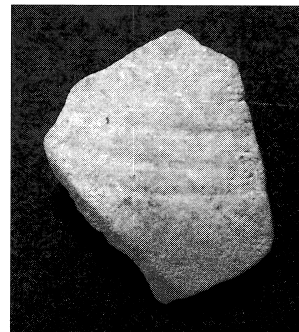


写真7 a 沈線

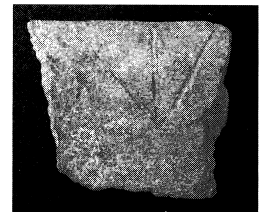


写真8 c 裏面

【喜念I式土器】第3トレンチ5b層出土。ミミズ腫れ状の突帯の両側に、工具で短沈線を斜位に連続して配したもので、喜念I式の連続刺突文よりも型式学的には後続すると

考えられる資料である (e)。

【その他の晩期土器】第1トレンチ8層で出土した。口縁部が出ていないので判然としなが、厚手であり、器面に吸水性が高いような粉っぽい質感を持ち、黄橙色がかった特徴は、喜念I式や宇宿上層式の特徴に一致する。

【弥生時代前期末～中期初頭頃?の壺】第2トレンチ2層出土。壺形土器の肩部と思われる小破片であるが、横位の浅い沈線文が3条認められる。平面の位置では、SK2墓壙上部に相当する (写真6a・写真7)。

【時期不明の土器】攪乱層出土。口縁部裏面に鳥の足状の三又の沈線文が認められる (c・写真8)。

石器 (写真9)

【磨石】第3トレンチ第5b層で出土した破損品である。他にも第1トレンチ4b層や表採品にも破損品が確認できる。大きさは、6.9～7.4cm、厚さ5.4cmあるが、破損しているため、本来はもう少し厚みがあったと考えられる。重さ495g、石材の同定は本報告にまでに行きたい。

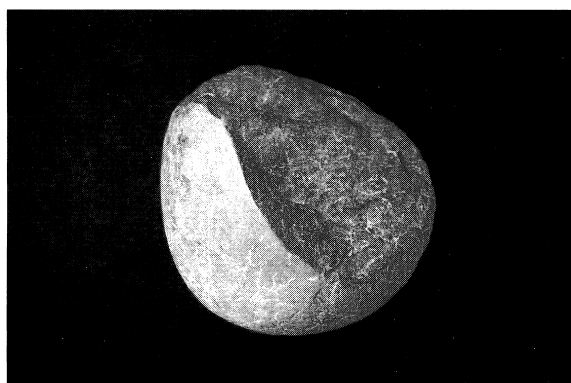


写真9 磨石

玉類 (写真10)

【貝小玉 (a)】第2トレンチSK2の墓壙内で出土した。外径は1.2～1.25cm、孔の径は0.34cm、側面幅0.38cm、重さ0.63gである。回転研磨などは行われなため、類似した自然の貝玉状品との区別は、墓壙に伴わなければ

明確でない。

【ヒスイ玉? (b)】第2トレンチSK2の墓壙上部で出土した。明らかにヒスイであるか否かは、成分分析を行わなければならないが、「はじめに」でも述べたように、徳之島には、蛇紋岩の存在が認められるため、慎重な対応が必要である。肉眼観察の結果、現段階ではヒスイとしておく。外径は不定形であり1～1.2cm大、穴の径は0.6cm、厚さ0.5cm、重さ2.49gである。表面はかなり手慣れ様の磨面となっており、一部には稜を形成している。垂飾品であると考えられる。同じく墓壙内で出土した貝小玉と組み合わせられていたのかは不明である。原位置であるとは思わず、どの被葬者に伴っていたか明確でない。

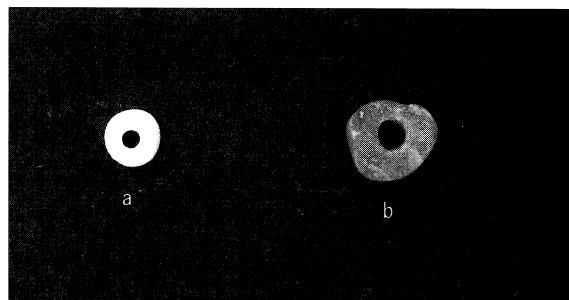


写真10 貝小玉 (a)・ヒスイ玉? (b)

貝製品 (写真11～15)

【ゴホウラ貝輪】第2トレンチSK2墓壙内北壁より壁に張り付くように斜位になって出土した。ゴホウラの背面利用貝輪であり、かなり薄手である。外径は8～8.42cm、内径は5.7～5.95cm、厚さ0.3cm、重さ29.39gである

(写真11a)。もう一つは、第1トレンチ攪乱層より出土した背面貝輪の破損品である。表面にかなりの研磨を施しており、平坦面を所々に形成している。残存部で重さ10.6gを計る (写真11b)。

【ゴホウラ螺腹部製品?】第2トレンチSK2の墓壙上より出土。当初は背面貝輪を製作した後の螺腹部の残りかと思われたが、螺塔部に径0.4～0.6cm前後の2つの粗孔がある。全体的にも摩滅しており、粗孔の様子からも明

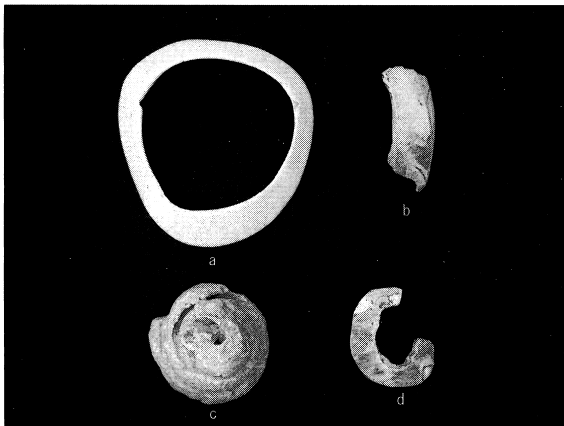


写真11 貝製品 (a・b・c)・化石 (c)

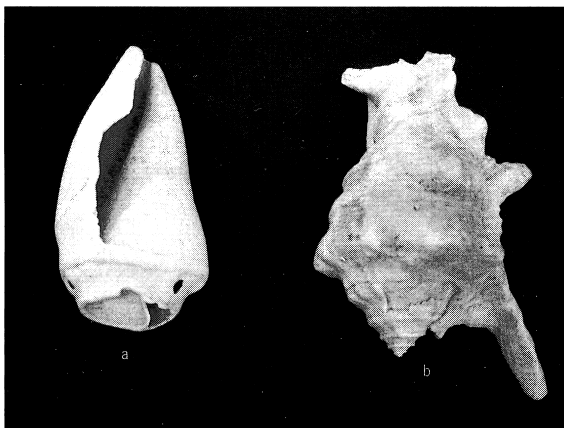


写真12 製品?・スিজガイ製利器

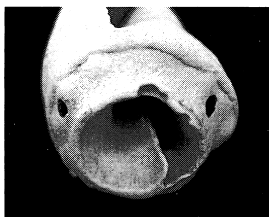


写真13 a穿孔部



写真14 bのエッジ

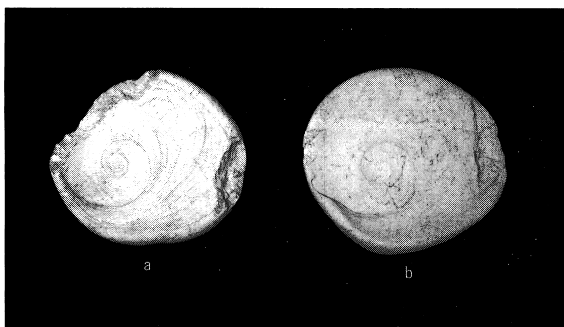


写真15 螺蓋製敲打器

確な製品と断言できないが、1992年段階に出土したタカラガイ製品にも類似した有孔例があることから、自然のものではないだろうと判断している。また、螺腹部には4.2~4.6 cmほどの粗孔も開いている。重さ167gである (写真12 a・写真13)。

【スিজガイ製利器】伊仙町教育委員会の四本延宏・新里亮人両氏との事前踏査の際に、見つけたものであり、試掘調査の際に採集した。上原静氏の分類 (1981) に依拠すると①番突起のみ残存し、この刃部は、胴体部の孔はC形で、螺腹から螺塔部にかけて平刃・横刃である。実際は何本に刃部があったのか不明である。重さ426gを計る。上原氏のいう奄美分布型に合致する (写真12 b・写真14)。

【ヤコウガイ製品】第3トレンチ7層上面より出土している。一部破損しているが、貝の結節部も取り込んだ体層部利用の垂飾品であると考えられる。残存部の外径は3~3.7cm、孔の径は1~1.8cm、厚さ0.3cm前後、重さ7.05gである。類例は、古代並行のフワガネク遺跡や泉川遺跡にある (写真11 d)。

【螺蓋製敲打器】第1~3トレンチのSK1・2内や3~5層に多量に出土する。ヤコウガイの蓋に敲打による剥落部分があるのが特徴であり、剥落部は、いくつかのパターンに分類される。貝刃や貝刀とも呼ばれる。正確な用途については、未だよく分かっていない。a・bともに、第3トレンチ5層出土である。aは、大きさが6.5~7.4cm、重さ166g。bは、大きさ7.2~7.8cm、重さ212gを計る (写真15)。

貝化石 (写真11 c)

第2トレンチSK2墓壙口の平石縁辺部に落ち込むように出土した。サラサバティのような円錐状の巻貝の化石であり、砂丘に自然に入り込むと考えることは、無理があると思うので、おそらく墓壙付近までは、人間の手によって運ばれたと判断できるが、墓に供献

されたかは明確ではない。残存部の高さ2cm、幅4.5cm。重さ73.8gを計る。

6. まとめ

トマチン地区では、第2トレンチを中心に、3・4層に墓域が営まれ、砂丘全体において5層以下に貝塚を形成している。したがって、貝塚⇒墓域の順に形成されている。砂丘は縄文時代晩期～弥生時代前期並行期の土器が出土しており、そのことから、その時期に砂丘が形成されたと考えられ、その時期をもって、この砂丘における先史時代の人間活動は停止した可能性がある。墓域は、第3トレンチまで西側には延長せず、北側は攪乱されているため不明であるが、南側と東側に範囲が広がる可能性がある。

この墓制は、これまでの縄文時代後・晩期の岩陰墓の改葬とは異なり、オープンサイトにおいて、追葬されていることや、上部構造に多量の礫群をもつ積石状の標石を持つ可能性のあること、下部構造には小口積の平石を巡らす石棺墓状であることなど、このような要素を持つ墓制は、南西諸島で初めて検出されたものであり(新里 2004)、慎重を期して、今後も調査を継続したいと考えている。

7. おわりに

トマチン地区の遺構については、未だ墓域の一部を確認できただけであり、その下に貝塚らしき人間活動の痕跡が確認できたにすぎない。遺物に関しては、未だ整理が終わったわけではなく、今後も様々な遺物が確認できると思う。

調査に際しては、多くの研究者や伊仙町教育委員会のご協力、ご指導をいただいた。特に伊仙町教育委員会を中心とする伊仙町民の皆様には、台風に閉じ込められ、電気も遮断し、全く外に出ることができず、食料も底をつきかけたとき、わざわざ町長・助役自ら差し入れに出向いてくださり、そのときの我々

の喜びは計り知れなかった。また、墓を検出したときも、歴史民俗資料館の義館長をはじめとする方々が、ヤギ料理の宴席を設けてくださった。ほかにも、地域住民の方々が毎日のように差し入れを届けてくださった。

伊仙町の皆様の物心両面のご援助無しでは、今回の調査はなし得なかった。記して心より感謝申し上げたい。

文献

- 上原静 1981 いわゆる南島出土の貝製利器について. 『南島考古』7. 4-46.
- 義憲和 1996 『創立15周年記念展示図録と解説』伊仙町歴史民俗資料館, 鹿児島.
- 木崎甲子郎 1985 『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社, 沖縄.
- 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究』法政大学出版, 東京.
- 新里貴之 1999 南西諸島の弥生並行期の土器. 『人類史研究』11. 75-109.
- 新里貴之 2004 南西諸島における先史時代墓制の集成. 『東南アジア考古学会研究報告島嶼地域の考古学』2. 1-18.
- 東和幸・中村耕治 1989 『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書』I
- 三宅宗悦 1935 南島の石器時代に就て. 『ドルメン』4-6.
- 三宅宗悦 1940 南島の先史時代. 『人類学・先史学講座』16. 1-43.